

(23) 足尾(あしお) 鉱山跡一追追記

10年ぶりに足尾鉱山の「本口沢」を、GPSのガーミンを携帯して再訪した。既報より詳細に現地を紹介できよう。なを、足尾鉱山は開発の歴史は長く、備前楯山を中心として広域にわたっている。それ故、多数の主要坑道があり、それらは安全のために全て確りと入口が閉塞されている。只1つ、「足尾銅山通洞坑」は、現在でも観光施設の1つとして、坑道内にトロッコで入坑することができる。かつての銅山の様子を垣間見ることができる。詳細は当施設のHPを参照すれば良いであろう。

2021年 7月

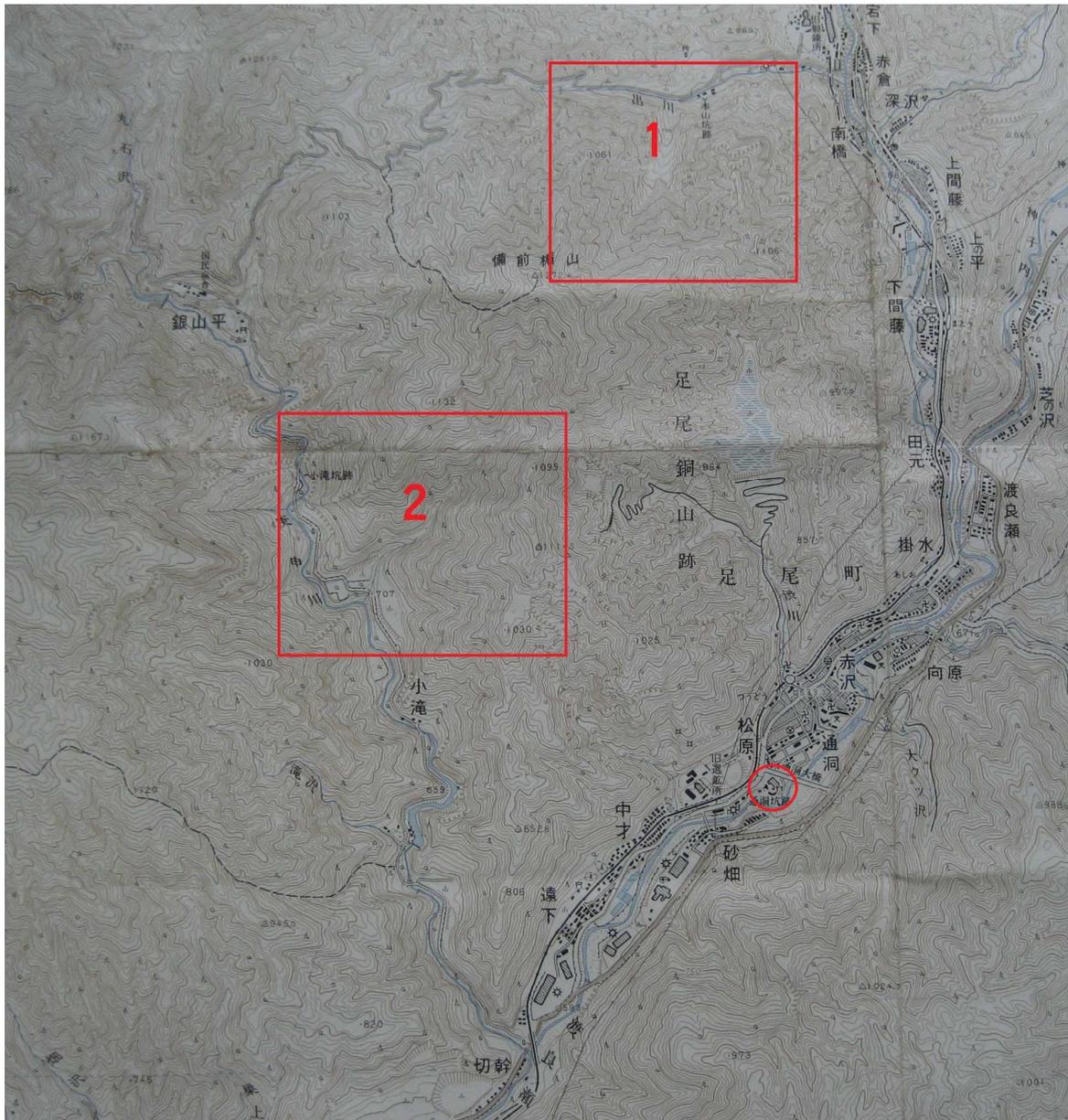


図1 「足尾銅山跡」が記載されている地形図である。少し古いかも。なを、現在、ネットで公開されている国土地理院の2万5千分の1の地形図は、地図を縮小し広域を表示すると、図2の如く「のっぺらぼう」になってしまう。後掲している図2と図3を比較すれば一目瞭然である。鉱山として備前楯山の全域にわたって幾つもの坑口が開かれていた。山全体に鉱脈があったようである。既報の参考文献(1)が詳しい。図中の1及び2の数値が記されている2箇所は既報である。今回はGPSによる経路ログを取得することを主目的として、番号1の「本口沢」を再訪した。下部の市街中の赤輪の所には、「足尾通洞坑」があり、観光施設が整っている。足尾鉱山に興味がある方は是非とも一度は見学しておく場所であろう。



図2 足尾駅あたりから、間藤方向へと北上して行く。精錬所跡があるA点の所で、左折し、西行して行く。赤輪の所が「本口沢」。なを、A点の更に北にある赤輪の所は観光施設のある「銅（あかがね）親水公園」である。ここも足尾銅山の観光場所としては、忘れてはいけない場所であろう。及び、鉱害の原点としての足尾を知るためにも。

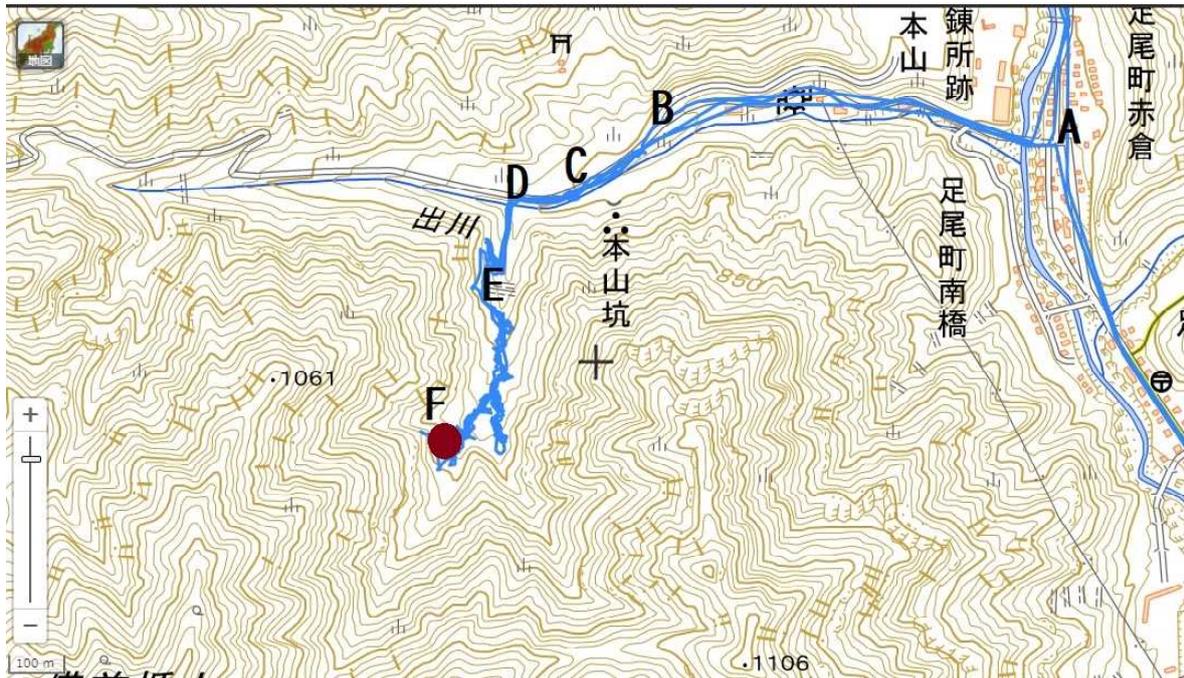


図3 図2の部分拡大図。A点で左折し、「出川」に沿った道を西行していく。B点付近には幾つかの案内板がある。入口が嚴重に閉塞された橋が出川に架かっている。案内板には「本山坑跡」と明記されている。C点付近に左側に伸びている側道がある、草木で覆われているかも。ゲートがあるので、本口沢に入るためには、このあたりから徒歩となる。D点には鉄板を敷き詰めた橋が架かっている。E点に出ると広大な沢に出る。F点の所の茶色丸は確認した坑口跡である。草木の生い茂っている時期は、草木に隠されて見通しがきかないので、そのことに留意する必要がある。坑口跡まで一応赤テープでマーキングはしておいた。結果として、得られた情報などからこの坑口跡を「本口坑」跡と推断した。本口坑については後掲の写真8中の案内看板を参照すると良い。
 若干の状況ながら、「本口坑」が先に開発され、その後に「本山坑」が開発されたと推断する。

鉱山跡写真



写真1 図3のA点。左手からやって来た。正面は西方向、右手が北方向。右手の高い建物は精錬所跡。正面の道に入って、渡良瀬川を渡り西行していく。



写真2 B点付近である。「本山坑」跡への橋。橋の先は結構平坦な敷地となっている。木が鬱蒼と茂っているので詳細は分からない。橋の部分の設備管理は現在でも確り為されている、古びてはいないので。推断するに、現在でも排水の処理管理が継続されているのであろう。排水管理が現在でも行われている銅鉱山跡は少なくはない。



写真3 同じくB点。正面の坂を登り切った所に「本山鉱山神社」がある。図3中の社記号の所である。延びている道を見ると、確りと刈り払いがされているようである。神社も生きていると思われるが、少し億劫になり、参拝していない。次回は参拝しよう。



写真4 C点付近。左側に側道が延びている。この側道を進んで行くと「本口沢」に入れる。少し先にゲートがあり、車は進めない。このあたりに駐車しよう。



写真5 E点。広くなだらかな沢に出る。転石だらけだが、期待に添えるかは、努力と根気である。どうも、上流に向かって左側端が当たる確率が高いような気がしているが。



写真6 F点付近。潤れ沢を登って来たこの当たりの、この林の中の先に、次の写真で示している坑口跡がある。草木の枯れている時期ならば見通しがきくかもしれない。



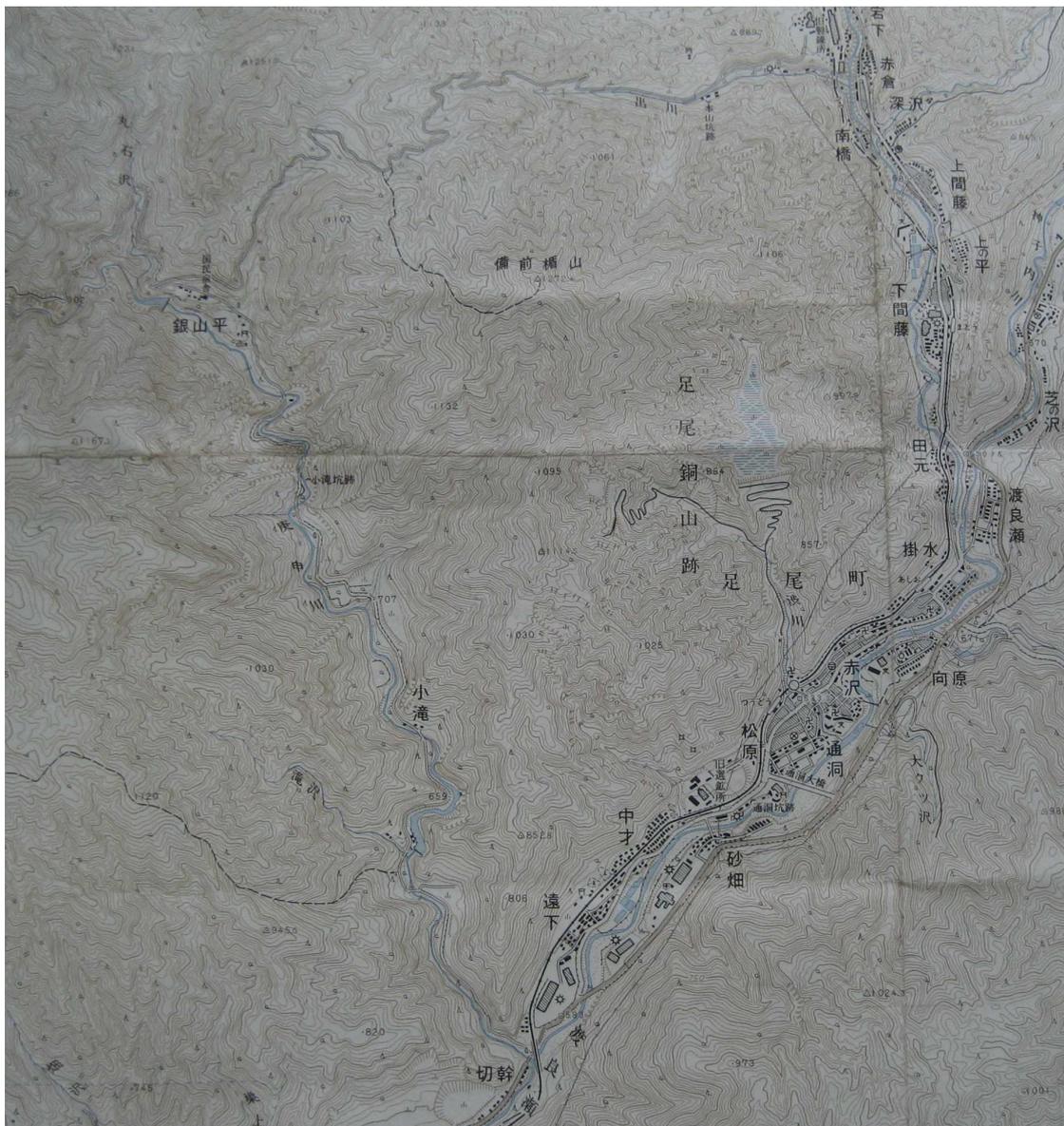
写真7 F点付近にあった、立派な石垣の側壁を持っていた坑口跡。大きな入口は確りと閉塞されている。入口正面に佇立している太い木が時の流れを思わせる。この坑口を「本口坑」跡と推断した。



写真8 B点にあった紹介看板。この付近に「本口坑」、「鷹ノ巣坑」、「有木坑(本山坑)」があり、一時期、足尾銅山の中心地でもあったことなどが記されている。

(23) 足尾(あしお) 鉱山跡

足尾銅山として、主に銅鉱石を産出し、精錬して銅を供給していた日本有数の鉱山であった。地形図中の備前楯山の山の地下一帯に鉱脈があり、掘り抜いた坑道の全長は何と1200kmにもわたっている。鉱山としての詳細は参考文献(1)が詳しい。銅鉱山であり、無数の鉱脈があったので、沢や川に銅の原石である黄銅鉱、黄鉄鉱の転石があろうと考え、何度か探査を行った。



地図 国土地理院地形図 2万5千分の1「足尾」

探査日 2008年10月、その他日

参考文献 「日本地方鉱床誌 関東地方」今井+河井+宮沢、朝倉書店、1973年。

鉱山跡写真



砂防ダム上流当りの本口沢。右が本流、左の方で転石を拾う。



形成中の孔雀石。旧小滝小脇の沢に架かっている橋の下近傍で

採集鉱物写真

品名	黄銅鉱 (Chalcopyrite)	銅の主要鉱石
化学組成	$CuFeS_2$	
色	真ちゅう色 (黄金色)	
光沢	金属光沢	
条痕色	緑黒	
比重	4.2	
硬度	3~4	
結晶系	正方晶系	
劈開	なし	

解説

(1) 目でわかる単結晶がないと、黄鉄鉱と黄銅鉱は外見から識別しにくい。条痕色は黄銅鉱は緑黒、黄鉄鉱は黒。破碎面の拡大から立方体の微結晶が見えないので黄銅鉱と判断した。足尾銅山産でもあるので。



本口沢で



本口沢で

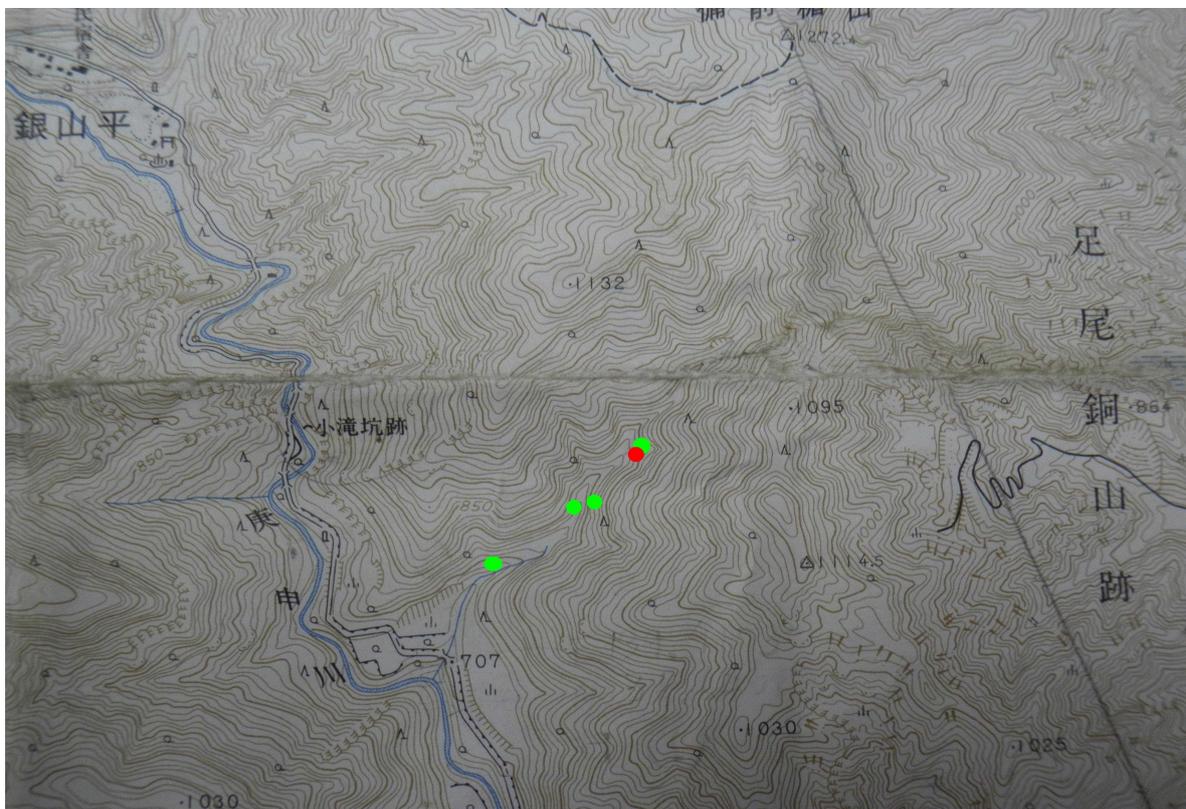


旧小滝小脇の沢の上流で

追記

2010年12月下旬、足尾鉦山を再探査した。最初、本山沢探査を行ったが、適当な標本を見つけることができなかった。場所を変えて、小滝小学校のあった沢に向かった。この沢を「小滝小学校沢」と、仮称しよう。前回ここで良品の標本を採集できていたからである。前掲の地形図中では、詳細な探査結果を書けなかったが、今回この沢の部分の地形図を拡大した「地形図2」中に探査結果を書き入れている。

渡良瀬川から庚申川に沿って車を進め、地形図2中の標高707付近に駐車できる。この所の沢が「小滝小学校沢」である。急なところは巻いていけば、普通に沢は遡れる。(沢の下山中に見つけたのであるが、沢の右岸の上部に、広くなだらかな林道があった。下山に使用するのも良いであろう。が、車道への出口は駐車場所のだいぶ北側となっている。) この沢には、途中から結構良好な鉦石の転石が転がっている。良好な標本を採集することは難しくない。お勧めの沢である。



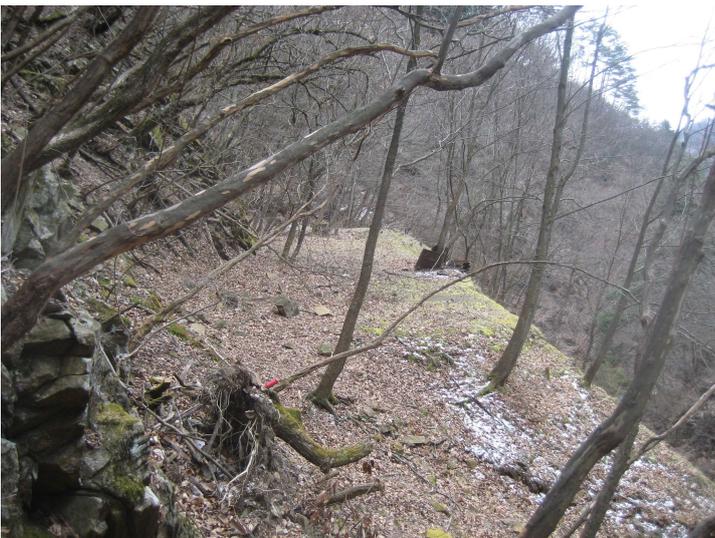
地形図2 仮称「小滝小学校沢」、黄緑丸は坑口跡。他に幾つかの坑口跡がある。赤丸は施設跡



沢で最初に遭遇した坑口跡。沢の右岸にある。しっかりと密閉されている。上部左右に伸びているワイヤーロープは地形図2中の赤丸の所まで伸びている。



沢の左岸にあった坑口跡。



地形図2中の赤丸の所である。プラトーとなっている。ワイヤーロープはこの所まで伸びている。中心当たりの黒いものは錆びきった金属備品類である。